☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
★幅広いﾈｯﾄﾜｰｸづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット　News Letter

第 36 号　2004 年2月16 日（月）　発行：歴史資料ネットワーク（神戸大学文学部内）

▲緊急シンポ講演者

▲出土した遺物を見学する
シンポ参加者

▲会場の様子

（緊急シンポジウム
「平家と福原京の時代
～楠・荒田町遺跡の
評価をめぐって～」
開催風景
2004 年 1 月 10 日撮影）

■□■目　次■□■

巻頭言
震災後、１０年目を迎えて　奥村　弘　・・・2
緊急シンポジウム
「平家と福原京の時代
～楠・荒田町遺跡の評価をめぐって～」参加記
樋口　健太郎・・・3
楠・荒田町遺跡保存と活用に関する要望書・・・・・5
◆◆シリーズ歴史遺産を考える　第２回◆◆◆◆◆◆◆
◆◇地域遺産としての自然海岸◇◆
～～深江会館にて、史料ネット講座を開催～～
参加記　石黒　志保・・・7
参加記　四方　俊祐・・・8
◆◇史料ネット講座によせて◇◆
阪神間の近代現風景　福嶋　忠嗣・・・9
◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆
◇猪名寺廃寺フォーラム参加記　高橋　明裕・・・１０
◆◇宮城資料ネット活動報告◇◆
体験記：宮城地震と資料レスキュー
吉川　圭太・・・１２
◇震災史料整理便り
山本家（中田樽丸関係）文書―弐―　・・・１３
◇各研究会情報
西摂研究会　河野　未央・・・１４
◇文献情報
◇お知らせ　～次回史料ネット講座～
シリーズ歴史遺産を考える　第３回
「兵庫津から神戸へ―ミナトと周辺の村々」　・・・１５

震災後、１０年目を迎えて

歴史資料ネットワーク代表委員　奥村　弘

阪神淡路大震災から１０年目を迎えました。マスコミをはじめ１０年目ということで、阪神淡路大震災とはなんだったのか、そしてそれは今被災地でどうなっているのが再び問われようとしています。１０年目の総括という問題は、阪神淡路大震災を歴史的な事件として考え、そこから未来に対して様々な課題をくみ出そうとする動きも強まっています。

その点では、人と防災未来センターや神戸大学の震災文庫など震災資料が、様々な形で活用されることが重要だとおもわれますが、それを十分利用し、基礎的な研究を踏まえて議論をすすめていこうという状況にはなっていないようです。またかならずしも様々な機関で保存されている震災資料を十分活用しうるサポート体制も十分でなく、なお多くの資料が非公開のまま眠っています。資料からもう一度震災像を問い直し、その上で震災の意味を考えて未来に引き継いでいく、そのようなかたちをいかに作っていくのかを課題として、今年も活動をすすめていきたいと考えています。

自然災害時の歴史遺産の保全についても、このような動きの中で防災の一貫として考えられるようになってきました。昨年６月、内閣府に「災害から文化遺産と地域をまもる検討委員会」が設けられ、京都と東京を事例に、地域の文化遺産をどう守っていくのかの指針を作成する作業がはじまりました。私もそこに参加していますが、国宝や重文などを守っていくという課題については、それなりのプランがしめされているのですが、地域の様々な歴史遺産をどう保全していくかという点では、なお多くの課題があるように思います。大震災時やその後の地震での私たちの活動から普遍化できる課題について、どこまで採用されるかはわかりませんが、発言をつづけていこうと考えています。

他方、私たちは、なお大震災が過去のものとなったとは考えていません。あまり報道されていないことですが、被災地の各自治体も住民も、震災直後の負債が今後数年ピークに達しようとしている点は極めて重要です。歴史文化の課題は、震災後も長く続くことは覚悟していたのですが、ここ数年間が正念場のように思えます。

歴史文化関係でも、昨年から神戸市文書館の開館時間が午後だけになるとか、芦屋市の負債整理のなかで、美術博物館の民間運営が検討されるなど、自治体によって支えられてきた基礎的な部分で困難が生まれてきています。自治体の関係部署を支援しながら、被災地における歴史文化を発展させるためにどのように活動していくのかが、改めて課題となってきました。史料ネットとしては、地域の方々の参加によって進められている被災史料の整理事業、市民講座「シリーズ歴史遺産を考える」や、様々な研究会でもそのような視点から問題提起ができればと思っております。本年もご協力のほどよろしくお願い致します。

（おくむら　ひろし、神戸大学文学部助教授）

緊急シンポジウム

「平家と福原京の時代～楠・荒田町遺跡の評価をめぐって～」参加記

樋　口　健　太　郎

2004年1月10日、神戸大学瀧川記念学術交流会館大会議室において、「平家と福原京の時代～楠・荒田町遺跡の評価をめぐって～」と題するシンポジウムが、史料ネットの主催によって行われた。

今回のシンポジウムは、昨年、神戸大学医学部付属病院の駐車場建設工事に伴って行われた兵庫県教育委員会による発掘調査(楠・荒田町遺跡2003 年度第Ⅰ区・第Ⅱ区発掘調査)で、いわゆる福原京の一部と推定される建物跡および二重壕が見つかったことを受けたものである。福原京や福原遷都の事実については、『平家物語』の記述などもあいまって一般にもよく知られているが、これまで発掘調査によってその遺構が明らかにされていたのは、今回発掘された地区の北に位置する祇園遺跡のみであり、多くの部分が未解明のままにされてきた。こうした点もあって、今回の発掘成果は多くの分野の研究者からの注目を集め、本シンポも参加者 184 名という大変な盛況の下に開催された。

さて、今回のシンポジウムで行われた講演の概要は以下の通りである。まず午前中は考古学からの報告が二本あり、今回の発掘を担当された兵庫県教育委員会の岡田章一氏が、遺跡の概要と今回の成果についてスライドを用いて紹介され(「楠・荒田町遺跡の調査」)、また祇園遺跡の発掘を担当された神戸市教育委員会の須藤宏氏は、古記録と地形によって清盛第の位置について検証されるとともに、祇園遺跡の調査結果について解説された(「祇園遺跡について」)。午後は日本史と国文学からの報告が三本で、京都大学の元木泰雄氏(日本史)は、福原遷都と還都にいたる政治的背景について解説され(「福原遷都をめぐる政情」)、神戸大学の髙橋昌明氏(日本史)は、遷都前後の福原について、風水説との関係や平氏一門および貴族の邸から報告され(「福原の平氏邸宅について」)、そのあと青山学院大学の佐伯真一氏(国文学)が、『方丈記』『平家物語』に描かれた福原遷都の文学的誇張や虚構性について報告された(「文学から見た福原遷都」)。

以上の報告に加え、午前と午後の二度にわたり討論があった。報告においても、討論においても、今回の発掘調査や福原京に関して様々な問題点が提起され、白熱した議論となったが、そのうち議論が最も集中したのは、やはり今回見つかった二重壕の性格についてであった。岡田報告では、伊勢平氏の居館跡と推定される三重県の雲出島貫(くもでしまぬき)遺跡で見つかった同様の溝との比較から、防御的機能をもつ二重壕というよりも区画溝であり、館を区画する溝と、敷地を区画する溝というかたちで別々につくられた溝とする意見があることを紹介されたが、これに対して討論では、会場から平泉や鎌倉の壕との共通性が指摘され、軍事的な意味を考えるべきという意見も出された。会場からは、こうした二重壕をもった巨大な第宅が所在する空間が首都であったとすれば、このことをどのように考えるべきか、という質問も出されたが、この二重壕をいかに理解するかという問題は、やはり平氏時代の福原の性格をどのように理解すべきか、また平氏自体をいかに理解すべきかという問題に直結するものとして重要だろう。議論は福原のみにとどまらず、平泉や鎌倉などを含めた全国規模での居館論の

必要性にまで及んだが、まさにそうした広い視野での研究の深まりが期待されるところである。

このほか福原京や福原遷都の理解についても様々な意見が出された。元木報告や髙橋報告では、遷都の政治的事情や遷都構想についてもその具体的な様相が述べられていたが、討論では、八省の移転や造都が実際には行われなかった点から、はたして福原京はあったといえるのかという質問が出され、副都と見る見解も示されるなど、議論は前近代における首都論にまで広がりを見せた。福原の地理的・空間的な問題についても、須藤報告で指摘された清盛第の位置をめぐる、髙橋氏と須藤氏との議論が目立ったが、個人的に興味深かったのは、須藤報告が地形から福原の空間構成について言及された点について、会場から、福原には二つの軸線、二つの中心が存在したのではないかという意見が示された点である。髙橋報告でも、平野の清盛第に対して荒田の頼盛(清盛異母弟)第という二つの中心があった可能性が指摘されていたが、今回二重壕が見つかったのは、まさに一方の中心とされる頼盛第の一部といわれる場所であった。今回見つかった遺構については、本シンポの議論の中でも、平氏一門の居館跡として一面的にとらえられる事が多かったように思われるが、このように福原に二つの軸があり、その中心の一つがこの遺跡であったとすれば、その発掘成果は、頼盛という人物の性格や平氏の権力構造について、新たな評価をもたらす可能性があるのではないだろうか。

以上、ここまでシンポジウムでの報告と議論について筆者なりにまとめ、感想を述べてきたが、このような粗い概要からでも、本シンポが、楠・荒田町遺跡と平氏時代の福原京に関し、現在までの研究を総括し、今後の課題を明らかにしたという点で、有意義なものとなったことは明らかになっただろう。佐伯報告でも述べられていたように、福原京については、今回の発掘成果の如何により、国文学や日本史といった諸分野の研究が根底から覆される可能性もあるが、まさに本シンポでは諸分野の研究者が一堂に会し、今回の発掘成果について議論をつきあわせることで、諸分野における意義が改めて確認され整理された、という点だけでも高く評価できる。ただ、難点もあえて一つあげるなら、今回様々な意見が提起され、首都の問題や武士の居館の性格の問題などについては、とくに広い視野での問題提起があったわけであるが、そうした意見の多くはただ提起されただけで、それに関する討議が充分になされなかったので、少なからず消化不良の憾みが残ったという点があげられる。もちろん、それは討論の時間の都合もあり、シンポの議論の範囲を超える問題もあったと思うから、述べても詮無いことなのかもしれない。しかし、今回議論し残された問題や大きなテーマについては別の機会にでも改めて、よりつめられた議論がなされることを切に願いたい。

なお、本シンポによって、楠・荒田町遺跡という遺跡の重要性が改めて明らかにされたわけであるが、今回見つかった遺構は現在、破壊の危機に直面している。すでに平泉では、奥州藤原氏の第宅跡である柳之御所遺跡が、国道バイパス工事の路線変更というかたちをもって保存されているが、本遺跡も同時代の武士の第宅跡であり、出土物の量こそ少ないものの、福原遷都という歴史事象の重要性を踏まえれば、柳之御所遺跡と比して遜色するものとはいえないだろう。また、とくに神戸の場合、近代以降の開港場としての都市イメージが強く、近代以前の地域の歴史については、余り広く知られるところとなっていないが、こうした遺跡の存在は広く市民に豊かな歴史像を提示するものとしても重要である。シンポで明らかにされた諸点とあわせ、こうした意味からも、何らかのかたちで遺跡を残していくことが望まれる。

最後に私事ではあるが、このようなシンポジウムが史料ネットの主催で行われるに至ったこと

については、実は筆者が以前、新聞記事で見かけた神戸大学医学部付属病院構内での発掘について、史料ネット事務局の松下正和氏にどのようになっているか尋ねたことが発端になっている。そのあと松下氏はすぐに県の埋蔵文化財調査事務所に連絡を取られ、昨年 11 月 26 日、筆者と松下氏、髙橋先生の三人で現地を見学させていただいた。そこではじめて二重壕の存在を知って、これを目の当たりにしたことでその重要性が認識され、シンポジウムの開催が企画されることになったのである。とはいえ、当初はこのような大きな事になるとは予想すらしていなかった。このような充実したシンポジウムが開催され、多数の方々が来聴されたことは全く以て夢のようである。このことは偏に松下氏をはじめとする史料ネット事務局の方々と報告者の先生方の御尽力のたまものだろう。最初から企画に関与させていただいた者として、このような参加記を書くのには必ずしも適任ではなかったにもかかわらず、以上のような感想を述べる機会を与えていただいたこととあわせ、厚く感謝申し上げたい。

（ひぐち　けんたろう、
神戸大学大学院文化学研究科）

【楠・荒田町遺跡保存と活用に関する要望書】

■日本史研究会

楠・荒田町遺跡の保存と活用に関する要望書

本年八月以降、貴大学医学部附属病院敷地の西北隅の調査によって発見された推定櫓跡および二重壕の遺構は、次の諸点において極めて重要な学術的価値を有するものと考えられます。

まず第一に、遺構は出土した京都系土師器皿の年代観から、一一八〇年前後の年代のものであるとみられ、福原を中心に存在した平家関係の遺構であると判断されます。神戸市内では、明確な平家関係の遺構は、いまのところ、現地より約六〇〇メートル北上した清盛邸跡の一部と推定されている祇園遺跡以外には、確認されていません。

第二に、確実な文献史料と伝承により、荒田に清盛の弟の大納言平頼盛の邸宅があったことがわかっておりますので、頼盛関係の遺構の一部である可能性が極めて高いと考えられます。荒田の頼盛邸は、いわゆる福原遷都時に安徳天皇が一時滞在し、続いてその父高倉上皇の御所となり、半年にわたる遷都期間中、政治的に中心的な役割を果たした歴史の舞台でした。

第三に、出土した二重壕は、伊勢の雲出島貫遺跡のそれや奥州藤原氏が源頼朝の軍勢の侵入にそなえて築いた阿津賀志山防塁などと比較可能な施設で、軍事上の意味を併せ持っていたと考えられます。同遺構は、櫓跡と推定される遺構とともに、源平内乱の最中における福原の平氏邸宅群の具体的構造の一端をしのばせてくれるもので、武家住宅や館の防御施設発達の歴史を解明するする上で、貴重な知見を提供するものであります。

現地には立体駐車場を作る計画があり、このままでいけば貴重な遺構は永久に失われてしまいます。卓越した学術研究の伝統で知られる貴大学が、構内重要遺跡の存在を知りながら、それを破壊してしまうのは、極めて遺憾であります。また今日、地域に開かれるべき大学に期待された方向から言っても、神戸市民が深く愛着をもつ平家関係の遺構にたいし、神戸の名を冠する学術研究教育機関が少しも関心を持たなかったといわれることは、将来に大きな禍根を残す結果になると考えます。

日本史研究会は、次の点を要望し、貴大学の英知と決断に強く期待いたします。

一、将来、考古学の発達にみあった高水準の再調査や遺構の整備公開の機会がおとずれたとき、それに対応することを可能にすべく、調査の後に遺構を厳重に埋め戻し、駐車場を作るにあたっては、遺構を傷めないようにしかるべき設計変更を行うこと。

二、現地に遺構の存在と意義を理解するための説明板を建て、また病院の一角に出土品などを展示し、駐車場を利用される方や歴史をたずねて現地を訪れる方などに、遺構の理解を深めるためのコーナーを設けること。

二〇〇三年一二月二〇日

日本史研究会

神戸大学長　　野上智行殿
同医学部長　　守殿貞夫殿
同附属病院長　横山光宏殿

■神戸史学会

神戸大学長・野上智行殿
医学部長・守殿貞夫殿
附属病院長・横山光宏殿

楠・荒田遺跡にかんする要望

神戸史学会委員会
代表　宮崎修二朗

前略、貴大学ますますご発展のこととお慶び申し上げます。神戸史学会は、神戸市民・兵庫県民を中心に、神戸に本拠を置く最大の歴史研究団体です。

さて、今年の9月と12月に、貴大学医学部附属病院敷地で出土した櫓跡と推定される遺跡および二重堀の遺構は、神戸に都が置かれていたことを、考古学遺物のうえから立証する、極めて重要な学術的価値を有するものと考えられます。すなわち、

①遺構は出土した土師器皿から、1180年前後の年代のものとみられ、福原を中心に存在した平家関係の遺構であると思われます。神戸では、明確な平家関係の遺構は、いまのところ、現地より約600メートル北上した清盛邸跡の一部と推定されている祇園遺跡以外には、発見されていません。

②荒田に清盛の弟の大納言平頼盛の邸宅があったことがわかっていますので、頼盛関係の遺構の一部である可能性が極めて高いと考えられます。頼盛邸は、福原遷都時に安徳天皇が一時滞在し、その父高倉上皇の御所となり、半年にわたる遷都期間中、政治の中心的な役割を果たしました。

③二重壕は、伊勢の雲出島貫遺跡や奥州藤原氏の阿津賀志山防塁などと比較可能な施設です。櫓跡と推定される遺構とともに、源平内乱期、福原の平氏邸宅群の具体的構造の一端をしのばせてくれるとともに、武家住宅や館の防御施設発達の歴史を解明する上で、貴重です。

現地には立体駐車場を作る計画があり、大学は遺跡を記録保存にとどめる方針とうかがっておりますが、ご承知のように記録保存は破壊を前提とするものであり、このままでは貴重な遺構は永久に失われてしまいます。卓越した学術研究の伝統で知られる貴大学が、構内重要遺跡の存在を知りながら、それをむざむざ破壊してしまうのは、きわめて残念であります。また、地域に開かれたという、今日の大学への期待からも、神戸市民が深く愛着をもつ平家関係の遺構の保存に、神戸の名を冠した最大の学術研究教育機関が取り組まなかったことになるのは、将来に大きな禍根を残すと思います。

神戸史学会委員会は、研究者団体とも情報交換しながら、今回の遺跡に対してどう対処すべきか、論議を重ねた結果、次の点を要望いたします。

一、遺構を厳重に埋め戻し、駐車場を作るにあたっては、遺構を痛めないようにしかるべき設計変更を行っていただくこと。
二、現地に遺構の存在と意義を理解していただくための説明板と、病院の一角に出土品などを展示し、駐車場を利用される方、歴史をたずねて現地をおとずれる方々に遺構の理解を深めるためのコーナーを設けていただくこと。

以上、　よろしく御願い致します。草々。
2003年12月27日

※楠・荒田町遺跡の保全と活用に関する要望書は、以下の学会からも提出されました。（提出日順）

■大阪歴史科学協議会　神戸大学学長・同医学部長・同付属病院長あてに「楠・荒田町遺跡の保全に関する要望書」を提出（2003年12月19日付）

■京都民科歴史部会　神戸大学学長・同医学部長・同付属病院長あてに「楠・荒田町遺跡の保存・保全と活用に関する要望」を提出（2003年12月25日付）

■大阪歴史学会　文部科学大臣・文化庁長官・神戸大学学長・神戸大学付属病院長・兵庫県知事・兵庫県教育委員会教育長・神戸市長・神戸市教育委員会教育長あてに「楠・荒田町遺跡の保存についての要望書」を提出（平成16年1月7日付）

◆◇シリーズ　歴史遺産を考える　第２回◇◆

地域遺産としての自然海岸

～～深江会館にて、史料ネット講座を開催～～

地域遺産としての自然海岸

日時：2003 年 12 月 6 日（土）13:30～16:30
場所：深江会館（神戸市東灘区深江本町 3-5-7／大日霊女神社境内）
講演：坂江渉氏（神戸大学文学部地域連携センター主任研究員）
「古代の浜辺と生活・信仰・伝承～西摂・神戸の松原海岸」
友野哲彦氏（神戸商科大学助教授）
「自然海岸のもつ経済的価値～環境経済学の立場から」
ディスカッション：司会　高橋明裕氏（立命館大学非常勤講師）
主催：歴史資料ネットワーク
共催：神戸大学文学部地域連携センター
後援：兵庫県教育委員会・神戸市教育委員会・芦屋市教育委員会・西宮市教育委員会

「地域遺産としての自然海岸」参加記　　石黒　志保

師走始め１２月６日に史料ネット講座「シリーズ歴史遺産を考える　地域遺産としての自然海岸」が行われました。坂江氏の講演は「海辺の松原と古代の人々の生活・信仰・行事との関わりと、『万葉集』の葦屋菟原ヲトメ墓の歌より、この地域の松原に集う民衆世界の中で、古い時代の首長墓がどのように認識されていたか考える」というものでありまして、古代の海岸は呪術行事を行う場所でもあり、また古くに造られた浜辺の古墳を松原海岸の歌垣に集う地元の人々は美女の墓に見立てていたということを、『万葉集』や『風土記』の史料を引きながらお話をして下さいました。また、友野氏の講演は、環境経済学の立場から、自然海岸の利用価値、経済的価値をアメリカの貨幣評価法などを用い説明してくださいました。例として御前浜をあげ、人が浜を訪れる頻度や目的などを表にされ、浜のレクリエーション機能の評価額を算出されておられました。そして友野氏の講演の最後に、兵庫県の森・川・海再生プランが紹介され、コンクリートの人工海岸を元の自然海岸に戻そうという取り組みがなされていることを知り、とても興味を引きました。古代、人々の生活の場、信仰の場であった浜辺が、今現在コンクリートの人工海岸となってしまっていることは非常に残念なことです。それを再生していくには海岸を破壊して来た時間の何百倍の時間もかかるかもし

れませんが、自然を取り戻さなければいけないとお二人の講演を聞かせていただき、そう思いました。

私は当日スタッフとして受付におり、講演に来られた方と接することができました。毎回熱心に講座に参加されている方がまた足を運んでくださったようでしたが、このような半永久的に考えなければならない問題はいろいろな世代の人々が考え、受け継がなければならないものだと思います。もっと、いろいろな世代の人が集まり、問題意識を高めていかなければならないと感じました。また、今回は会場の関係や冬に入り夜が早くなってきていたので、前回の講座「中世の国際交流と兵庫津」の時のように茶話会を用意しておらず、こちらとしても、また参加された方も少々議論の場や質問の時間が物足りなかったかなと見ていて思いました。

最後になりますが、今回の講座で坂江、友野両氏の講演を聞かせていただき、古代の浜の様子と今の海岸の様子を対比することによって歴史遺産の重要性を感じました。また、自然海岸の活用性、重要性などを現在に、未来に活かすために歴史を知っておかなければならないのだと感じた一日でした。

（いしぐろ　しほ、
神戸女子大学大学院文学研究科）

「地域遺産としての自然海岸」参加記

四方　俊祐

2003年12月6日（土）、史料ネット古代史の講座が深江会館で開催された。実は、私はアメリカ現代史を専攻しているために日本史は大学受験程度の知識しかなく、ましてや古代史などはほとんど忘れているという有り様である。そのような私が参加した理由は、自分の専門範囲外の分野について興味があった（例えば研究方法について、など）こと、そして偶然大学構内のポスターを見たこと、また他分野についての興味を話した時に偶然聞いていた史料ネット関係者の方に熱心に勧められた（特に友野氏の環境経済学について）こと、からであった。

ともあれ、私がその講座に関する感想を書くことになったのだが、史料ネット講座の真意を完全には理解していない状況なので、内容がその真意にそぐわないとしても御容赦頂きたい。まずは、坂江氏の講演について。古代の神戸近辺の海岸が当時の周辺住民の生活とどのように関り合いがあったのかについて、非常に豊富な史料（！）を用いて説明されていた。具体的な内容としては、日本の海岸線付近でよく目にする松に焦点を当て、松林のある海岸などの特定の場所が神々を迎える古代の信仰の場であったこと、その浜辺での神事（祭祀）の際には男女の出会いの機会が作られていたこと（これは坂江氏が近年の学説に対して独自の視点から主張しているのであろう）などについて興味深い話を聞くことができた。大学受験の歴史では、古代の民衆の生活は辛く悲惨な状況であるとの側面が強調されるのだが、坂江氏の講演では当時の人々が活き活きと生活している様

子を想像でき熱心に聞き入ることができた。また、古代伝承歌や説話を使って老人が男女の間を取持ち、または妥協を引き出させるという行為は古代だけに限られたことなのか、あるいは古代ではこのような行為が日本各地で見ることができるような地域ネットワークがどれくらい形成されていたのか、興味は尽きない。

次に友野氏の講演について。この講演では、環境を貨幣価値に見立ててその存在意義を評価しようとする環境経済学の立場から話がされた。アメリカでこのような評価方法がよく採られてい

ると聞いて、いかにもアメリカらしい合理主義的（？）な評価だと感じた。評価手法や価値基準は様々な要素が絡み定義付けすることが難しいように思われるが、誰から見ても重要だと感じる文化財・自然公園よりもむしろ身近にある自然をどのように取扱うかの意識を高めるために必要な学問であると思う。また、ディスカッションでの議論で友野氏が語ったように、全ての環境を元の自然に戻すことは実質的に不可能であるが、非効率的な土地利用（例えば工場の遊閑地など）を自然海岸に戻すことを考慮する際に有効であるとの指摘は強く共感した。

最後に講座全体としては、年配の方が多く学部学生など若者がもう少し参加してもよさそうな内容だったと思う。今後の講座に参加できるときは後輩にも声をかけてみよう。

（しかた　しゅんすけ、
神戸大学大学院文化学研究科）

◆◇史料ネット講座によせて◇◆

阪神間の近代現風景

福嶋忠嗣

『芦屋の景観資源』（芦屋の景観シリーズ１　芦屋市発行 1993 年 2 月　編者：芦屋の景観を考える会代表福嶋忠嗣）に発表した《景観ポイント》（道ゆく人が気持ち良く感じ、そんな芦屋ならではの表情を持ったところを、まち中からピックアップした）の中には、先の大戦の戦渦を潜り抜け、なお近世の集落のまち並みとたたずまいを残していたところが、旧浜芦屋・東芦屋・三条という地所にあったのです。しかし今回の震災により、その面影はそのまち割に辛うじて残るだけになっています。そのたたずまいというのは、中２階の小屋裏に農作業用の背の低い収納空間だけを持った、一般的には平屋としか解らない瓦葺土塗真壁造の民家形式をしているもので、そのうえ長屋門などの門構えの前庭と、築地や土塀などによってそのまち並みから区分された前栽（せんざい）を持ったものでした。

今調査している、阪神南地域ビジョン委員会・県民行動プログラム《プロセス重視の阪神南夢マップづくり》（平成 14 年度活動記録集・発行阪神南県民局）の芦屋・西宮分の中間発表（西宮文化協会主催・阪神間の新しいビジョンスピーチの会「新山陽（R43）西国街道（R177）調査調べ」2／6　PM2　西宮神社会館）では、その西宮までの分を住宅地図にプロットし、街道名所となりえる資源を絵図にしたのをもとに、スピーチすることになります。この西宮も先の大戦で壊滅的な被害を被り、いわゆる近代を表象するものが残っていません。ただ唯一、旧西国街道沿いの下大市の辺りには、今回の震災にもかかわらず近世の集落のまち並みと、その後ある程度手の入った、たたずまいが辛うじて残っています。

その前栽には必ず、選定の行き届いた松の一本立ちが見られることの意味を、私は今までずうっと考えてきました。

以前から主催しています、〈アシヤ景観シンポジウム〉で《アシヤの住景観・和洋館と蔵》（1992。10.31 アシヤ市民センター）と題した報告をしており、柳田国男著『信州随筆・しだれ桜の問題』を下敷きにして、それには何かの神の寄り代（よりしろ）としての下意識があり、それは今も人々の間に、松の一本立ちをめでる心に残っていることを表している。そしてそこから座敷の神棚へと降りてきて、家を守ってくれると思っているのではないかというものでした。また「氏神と氏子・ウブスナ様の名・頭屋と神社の関係」を引いて、お稲荷さんに代表される屋敷神が「何々家」一統を、またお地蔵さんや境の神（さえのかみ）がその集落を含めた街道一体を守ってくれると、考えてきたのではないかというものでした。

今やっています両街道調査区域にも、そこに済んでいる人たちの地域に対する潜在意識という、地域に対する思いの紐帯がそこに透かせて見えるのではないかと思っています。

近代になってからは阪神間、特に芦屋では集落周辺のもと雑用地や林地などに、新しい住形態の和洋館が現れてきます。それは以前の集落の塊に対して、縦へと高さを持つものでなおかつ散在していたものです。これらの邸宅にも必ずといっていいほど和館が併設されていました。これら和館は和風という意味では西欧風の住形式の洋館とは異なり、以前の民家の住形式を引いています。ですが、それらと根本的に異なるのは、多層構造で南面する２階には足下までガラス戸で解放された廊下を持っていたということです。ですが民家の前栽形式はそのまま受け継がれてきています。そのうえそこにはなぜかモチノキまでもが植えられているのです。

このモチノキについては、司馬遼太郎著『菜の花の沖』に描かれた淡路の集落での逸話として紹介されています。それは、この樹皮をめくってその樹液からトリモチを採取していたというものです。このことから考えても、この辺りでも実際の農作業の一部として、何か物を接着するために利用していたのかと思われます。その後年、この樹が常緑でなおかつ真赤色の実を沢山つけることから、豊穣のイメージと神の寄り代がダブルイメージとなり、今も前栽に残っているのではないかと類推しています。

私などがガキの頃に、ゴンタをしていた領域というのは丁度浜芦屋の集落の周縁部とも重なります。それらの路地と民家や和館の前栽を区分していたのは、それほど区画性の高いものではなかったのです。それは、北原白秋作詞で山田耕筰作曲の唱歌「カラタチ」にもありますような生け垣でした。秋になれば白い花が咲き、金のまるい玉の小さな実が沢山なるもので、その頃よくガキども同士で投げあって遊んだものです。そしてその裏庭の屋敷神の祠の脇にはよく夏ミカンの樹がありました。たわわにこれもまた黄金の実を付けており、これは今回の震災でも、旧集落周辺の雰囲気を唯一今日に伝えてくれているもので、それが何か救いのような気がします。そして当時は、この夏ミカンの皮を用いてマーマレードを造り、朝食のトーストに塗ってコーヒーと一緒に食べるのが、この辺りのモダンなブレックファーストでお屋敷でのものでした。三輪福松著『イタリア美術・人・風土』によると、ども原産地は中国南部でここから北上して、当時の長州の小島の農婆の手によって最初に栽培され、その栽培技術がここで確立された後、『菜の花の沖』の頃の廻船で運ばれ瀬戸内海沿岸に広まったのではないかと類推されています。そしてこの黄金の実という、これもまた豊穣というイメージを乗せて、お屋敷の裏庭の祠の脇の位置を占めるようになったのではないかと考えられる。こういうことを考え併せてみますと、両街道交通以前に、近世の海の道を伝って持ち込まれた文物の分布が、私たちのまちの記憶として今もあちこちに残っているのではないかと思われます。

そういうことを考えていますと、現在の震災モニュメントや慰霊碑を巡る 1.17 メモリアルウォークも現代版街道を行く《新しい旅人》ということになるのではないでしょうか。

（ふくしま　ただつぐ、景観アドバイザー・
阪神南地域ビジョン委員会ＡＮＡ代表）

猪名寺廃寺市民フォーラム参加記

高　橋　明　裕

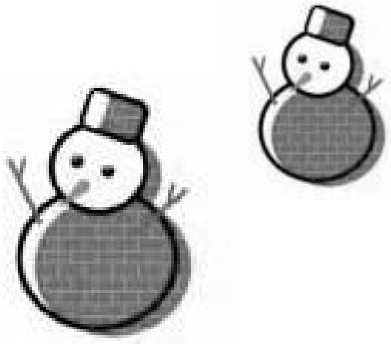
２００３年９月２１日（日）、「よみがえれ！白鳳の大伽藍　猪名寺廃寺市民フォーラム」が園田公民館にて開催された。自然と文化の森協会の主催、猪名寺自治会、園田地区社会福祉連絡協議会、園田地区市民運動推進協議会の共催、尼崎市、尼崎市教育委員会、そして歴史資料ネットワークが後援である。主催者挨拶の後、白井文市長が挨拶を行った。客室乗務員・コンサルタント業出身という異色の市長だけあって、方々の苦労を労う政治家

らしくない挨拶だった。午前の部はパネルディスカッションが行われた。尼崎市教育委員会学芸員の岡田務氏が発掘調査の成果について基調講演し、パネラーは法園寺副住職の松田常史氏、自然と文化の森協会会長の畑喜一郎氏、コーディネーターを兵庫県埋蔵文化財調査事務所主査の山上雅弘氏が務められた。なお猪名寺自治会長の寺田良道氏は欠席であった。岡田氏は猪名寺廃寺の発掘調査の成果を市民にわかりやすく説明され、塔と金堂が東西に並ぶ法隆寺式の伽藍を有する西摂地域でも有数の白鳳寺院であったことを紹介された。白鳳期の建立者については複数の説を挙げられ、慎重な考えを示された。松田氏は当寺に伝わる縁起を紹介され、トンド焼きや地蔵盆など、現代に伝わる民俗行事と当寺との関係について言及された。畑氏は地元で農業を営んでいる立場で、猪名野における灌漑のあり方からこの地域の開発に苦心した古代の人々に思いを馳せる発言をされた。猪名寺の学術的価値をひとまず確認することに重点を置いた岡田氏、山上氏と、伝統行事や信仰の観点から地域の人々と猪名寺との関わりを説いた松田氏、畑氏という異色のパネルディスカッションであったが、公民館の２階ホールには 200 人近い地域の人々が詰めかけていた。会場内ではＣＧ映像により猪名野にそびえたつ伽藍の再現画像が映し出され、この猪名寺・園田地区を歴史遺産を資源に活性化していきたいという熱意に会場はあふれていた。

午後からは「猪名寺歴史ウォッチング」と題して猪名寺地区、東リ株式会社の敷地内に保存されている黄金塚及び復元されている猪名の笹原、猪名寺廃寺（現・法園寺）を巡検した。50 名ほどが参加し、市民が自ら『尼崎市史』『尼崎地域史事典』をもとに参考資料を作成し、ガイドも務められた。尼崎市の自治体史関連の事業が市民に利便を提供している好例である。巡検終了後、懇親会が催された模様である。

午前､午後と丸一日がかりの企画だったが、猪名寺・園田地区の市民の企画力・実行力に感嘆する思いだった。その中心となったのが自然と文化の森協会である。尼崎市都市政策課のホームページによれば、この市民組織は開発の中で失われつつある猪名川・藻川流域の自然環境、田園風景、まちの伝統・歴史を資源としてまちづくりに活用すること、市民・行政・事業者による協働型のまちづくりを理念として掲げており、今回の企画もそうした理念と情熱にあふれたものと理解できる。午後の地域巡検において猪名寺地区の古い町並みや猪名寺廃寺後背に残存する佐璞丘自然林に注目したことなどにそうした理念がよく現れており､鋭い着眼であると感じた｡一方、古代の猪名寺地域の歴史像をもっぱら猪名部の活躍に求め、自らを木工集団である猪名部の子孫と強調する傾向が見られたのは、単純明快な打ち出し方としてわからないではないが古代以来幾多の沿革を通じて地域の歴史的個性が形成されてきた点を見誤らせるものと言わなければならないであろう。協働型のまちづくりの中で学術研究者が果たしうる役割を追求していきたいものである｡その意味で、学術と地域の伝統・信仰を交錯させた午前のシンポジウムは両者の理想的な共演だったといえるであろう。今後も同協会の活躍に期待したい。

（たかはし　あきひろ、
立命館大学非常勤講師）



◆◇宮城資料ネット活動報告◇◆

体験記：宮城地震と資料レスキュー

吉　川　　圭　太

2003年7月26日、宮城県北部を震度6弱の地震が三度にわたって襲った。ちょうど二ヶ月前の5月26日にも宮城県沖を震源としてやはり同程度の地震が発生していた。仙台に住む私には、その5月の地震の方がよほど強く感じられ、7月の地震発生時には正直なところ、県北でこれほど深刻な被害をもたらしているとは思わなかった。ニュースによって被害の大きさをすぐ知ったが、同じ県内でのことなのに、まるでずっと遠くの場所での出来事なんじゃないかと錯覚してしまうほどだった。

そんななか8月に入って、資料レスキューのボランティアが募集され、私はこれに参加した。最初の活動は8月10日、河南町で行われた。いくつかの班に分かれて行動したが、なかでも被害規模の大きかった前谷地の齋藤家(現・宝ヶ峯縄文記念館)の資料救出班に私は加わった。今思うと、ここでの体験が最も印象に残っている。

当日の朝、車で齋藤家に向かって河南町に入ったとたん景色は一変した。視界に入ってくる家々の屋根にはブルーシートがかけられ、道路には亀裂・陥没が激しく、塀は崩れていた。実際に被災地の状況を目の当たりにして地震被害の甚大さを実感し、言い方は悪いが、どこか他人事のようだったそれまでの甘い考えに気付かされた。

齋藤家に着くと当日の主な活動舞台となる表土蔵に案内された。ここは同家の中でも特に被害の大きかったところである。斎藤家といえば全国でも屈指の大地主の家と聞いていたが、実際蔵の中に入ると100箱以上の茶箱や、多数の新聞類など、その資料の膨大さに圧倒された。と同時に、新聞が入っていた3つのスチール棚に至っては脚が折れ曲がって倒れているなど、激しく散乱している資料もあり、地震の凄まじさを物語っていた。現地では未だ強い余震が続いており、住民は不安な生活をおくっているとのことだった。当日も何回か余震があり、何段にも積み重ねられた茶箱がいつ崩れてきてもおかしくない状況の中での活動だった。私はこの表土蔵の現状記録と資料搬出作業に加わった。資料調査については大学の授業では教わったことはあるが、今回のような大規模な活動に実際参加するのは初めてで、膨大な資料を前にどうしてよいか戸惑っていたが、先輩方の指示でなんとか対応できた。ただ、資料をレスキューすることが第一だったので、もっと迅速な行動ができればよかった。途中で搬出のための用具がきれたため、一時作業を中断するはめになったことなどは反省すべき点である。

この作業で主に私はスケッチによる現状把握を担当したのだが、もともと絵を描くことには興味があり、このような場でそれが少しでも活かせればいいなと思っていた。蔵はとても広く、多くの資料が散乱していたので、スケッチ及び文字情報の量も多数になった。また、その日は台風一過で、蔵の中は気温と湿度がとても高く、みんな汗だくになっての作業だった。その日の作業が終わって帰り際、ご当主の齋藤武子さんに「有難うございます」「これからもあなた達の協力が必要なんですよ」と言われたことが忘れられない。やってよかったと思った。自分達の活動に素直にやりがいを感じるとともに、今では自分自身のこととして受けとめられるようになっていた。

齋藤家での作業は2回に及んだが、その後も鹿島台町など4つの町での被害状況及び資料の現存状況の調査を中心として活動は継続的に行われた。家屋の補修工事などで忙しい最中、訪問したほとんどのお宅では、その土地のことをほとんど知らないヨソ者に快く熱

心に話をしてくれ、家の来歴やその地域に関すること等いろんなお話を伺えた。これも案内役として同伴してくれた現地の方や役場の方のおかげである。そして例えば日露戦争時の血付きの軍服や、たくさんの寄せ書きがされた出征旗など実物を目の前に置いて熱心に話してくれるのを聴くと、その家の記憶が呼び返されて、自分もその一端を共有している気分になれた。資料はその家や地域で保存されて、そこに住む人達によって語られていくことが第一で、そうしてこそ生きたものになるのだと感じる。

この調査活動での反省点を挙げるならば、やはり各自治体を迅速に回ることが出来なかったことだろう。順次一つずつの自治体を調査していったので、最後の南郷町は 11 月になってしまった。訪問先のお宅では、つい数週間前に資料を廃棄していたところもあった。もっと早く回っていたら、もっと多くの人が参加してくれたらと痛切に思う。

今回のレスキュー活動を通して、一人一人の出来ることはたとえ限られているとしても、それが集まれば大きな力になることを実感した。これがボランティアというものなんだなと思う。今回のような地震被害によるレスキュー活動は、これで最後であって欲しい。しかし、ここ十数年のうちに高い確率で大地震が発生すると予測されている地域があることは現実である。宮城県もそのうちの一つである。今回の一連の活動を今後どのように活かしていくかが重要だろう。

（よしかわ　けいた、
東北大学大学院文学研究科修士課程）

震災史料整理便り
山本家（中田樽丸関係）文書―弐―

今回からは山本家文書の内容についてご報告していきたいと思います。前回報告しましたとおり、現在までに整理を進めてきた史料の大半は昭和初期の「中田松兵衛商店」(中田樽丸)の経営関係資料です。この中田松兵衛商店（以下、中田商店）については、前回の報告の際に「樽の製造会社」と紹介したと思います。しかし、この中田商店が扱っているのは「樽丸」。前回の報告を脱稿した直後、早速神戸女子大の今井修平先生の方から誤りをご指摘いただきました。今井先生からは、「樽丸」についていろいろご説明いただいたのですが、不勉強を反省し私の方で再度調べてみたところ・・・

「樽丸」＝「酒樽の用材／樽に組む材の板」
（『小学館日本国語大辞典』）

実際、商品のやりとりを示す書簡やはがきなどでは、材木商から「樽丸」を仕入れ、また樽の製造会社へ「樽丸」を発送していることがわかります。したがって中田商店は樽の製造会社ではなく、樽材の流通を担う会社だということが判明しました。この場をかりてお詫びをするとともに、訂正しておきたいと思います。

さて、この間史料整理は3回、10 月 11 日、12 月 13 日、1月 24 日（いずれも土曜日、於神戸大学文学部古文書室）に行われました。10 月の整理では経営帳簿や新聞、写真などさまざまな種類の史料をあつかいました。また 12 月は商取引の状況がわかる書簡・はがきの整理を行いました。後者については、1 月も引き続いてその整理を行いましたので次回まとめて報告したいと思います。

10 月の整理から、参加者には自らが整理した内容についてのメモをとっていただいています。10 月の整理に関しては多様な史料をあつかいましたので、今回はそのメモの一部をご紹介することにより内容紹介にかえたいと思います。

①経営帳簿類に関して
・昭和１０年代までの（中田）商店の伝票や「日計帳」を整理。大型のものでは三年分の入荷口座簿が取引先毎に綴られていた。

②新聞に関して
・阪神間の地域を対象とした「小地方新聞」(発行所

が灘・尼崎・鳴尾など）とでも言うべきものに掲載された選挙関係（町会議員選挙？）記事を集めた文書群。
・大正・昭和の始めの「西摂新報」。国会解散・選挙の記事が掲載（昭和２～３年？）新聞のほかに選挙の推薦状（中田松兵衛が御影郷町会議員選挙に出馬）などもあった。
③その他
・南洋興発株式会社発信の封筒のみ（２０通ほど）が一括。内容は不明。
・写真数点

特に②に関しては、参加者から以下のような感想があわせて寄せられました。「今回の整理で興味深かったのは、「選挙新聞」と書かれた包紙の中から出てきた新聞の束だった。新聞の内容はいずれも大正４年５月に行われた御影郷会議員選挙に関する記事である。…このような地方紙の残存状況はわからないが、地域部数が限定されていることから残りが良くないとしたら史料的価値もあるのではないだろうか。…また、樽丸商中田松兵衛の地域の政治への強い関心が窺える点でも非常に興味深く思えた。」

このように１０月の整理分に関しては中田商店の経営規模の大きさといった面のみならず、地域の名士としての中田松兵衛氏の一側面が浮かび上がる文書群であったように思います。また感想にもありましたように、地域紙など残存の可能性が少ない新聞が多数でてきたことも、大きな発見でした。（K）

■各研究会情報

西　摂　研　究　会

河　野　　未　央

２００３年１１月８日（土）午前１０時から尼崎市立地域研究史料館にて、亀岡哲也（近江八幡市　市史編纂室）により「近世兵庫津をめぐる被差別民について」というタイトルで報告がありました。亀岡氏は、『岡方文書』や『神戸市史　第二輯』など刊本で比較的入手しやすい兵庫津の基礎的な史料をもとに「ヒジリ・長吏」・算所村・夙村といった兵庫津内外に展開する被差別民、またその集落の多様な実態を分析されました。もともと町方内部の状況を示す史料が少ない兵庫津においては、被差別民に関する記載のある史料もほとんどない状況ですが、亀岡氏は上記文献の丁寧な読み込みから現段階におけるほぼ全ての史料を取り上げ、また絵図なども駆使して報告されました。

討論では、このような史料状況をふまえ、亀岡氏が上げられた史料をもとにできる限り具体的なイメージを描くことを目的とした質問が多くなされました。算所村については常設の芝居小屋と芝居興行の状況、特に後者については西宮との関係に質問が集中しました。他にも近世初期に算所村に類族（キリスト教信者本人とその家族・子孫）が預けられていたことも報告されたため、その点について事実関係の確認がなされました。また、長吏や夙村に関しては兵庫津を含めた地域の警察権がどのように構成されていたのか、長吏と夙村と相互関係はどうなっていたのか、という点をめぐって議論がなされました。亀岡氏が提示された史料中にはこのような論点に関する重要な記述がでてくるのですが、それが非常に難解であったため、全員がうなりながら手元の史料を必死に目でおうという一幕もありました。時間的制約もあり結論を出すにはいたりませんでしたが、様々な解釈を提示する作業を行う中でいろいろな可能性がみえてきたように思います。

最後に岩城卓二氏が当日の討論についてまとめられました。さらに、算所村の類族や兵庫津の長吏支配のあり方など、このような被差別民の世界は十八世紀上知（幕府領編入）までは尼崎藩の介入がなければ成立しえない世界であり、上知以後の構造の組み換えが必要になったときどのように展開したのか、ということについても考えていかなければならないという展望を示されました。

史料的制約が大きいため研究素材としては大変ですが、近世期における地域の構造分析を行う上では重要な分野でもあります。今後の研究が期待される報告であったと思います。

（こうのみお、神戸大学大学院文化学研究科）

■受贈図書

論文等表題	筆者（著者）	誌名（書名）	巻号	発行年月日
『京都市第３次地震被害想定　報告書』	京都市			2003/10

■文献情報

論文等表題	筆者（著者）	誌名（書名）	巻号	発行年月日
私の震災体験　一月十七日・十八日のこと	直木孝次郎	『歴史と神戸』	241(42-6)	2003/12/01
震災後の発掘による西摂の古代史の成果	天羽育子	『歴史と神戸』	241(42-6)	2003/12/01

◎◎おしらせ◎◎

●○次回史料ネット講座～シリーズ歴史遺産を考える　第３回～○●

兵庫津から神戸へ―ミナトと周辺の村々

国際都市・ミナト神戸は、幕末の開港によって現代の基礎を築きます。しかし開港場が突然生まれたわけではありません。古代以来の歴史がその背景にあります。中でも直前の江戸時代は、鎖国など停滞のイメージで語られがちですが、戦乱と大震災で壊滅的な被害を受けた兵庫津―神戸が、大きく復興を遂げ、開港場に指定される土俵を築いた時代でもあります。

歴史資料ネットワークの今年度３回目の市民歴史講座では、近世から近代への大きな歴史の転換点に、復興をとげ国際舞台に躍り出る兵庫津―神戸の歴史、その核になった外国人居留地の成立をたどります。また西摂屈指の都市・兵庫津は、周辺の村々と結びつくことで成り立ち、また影響を及ぼしていました。周辺村々からの新しい視点も交えて、神戸の歴史を深めます。

日時　３月 27 日（土）午後１時から午後４時半まで

会場　生田文化会館

（神戸市中央区中山手通６－１－40　０７８・３８２・０８６１）
県庁北西、地下鉄県庁前駅から５分、
ＪＲ・阪神元町駅から 10 分、神戸高速花隈駅から 10 分

講師　神戸国際大学教授・桑田優氏　「兵庫開港―近代神戸の始まり」
古文書研究家・秋宗康子さん「須磨の村々と兵庫津」

資料代５００円が必要。要予約。
問い合わせは歴史資料ネットワークまで。（TEL０７８－８０３－５５６５；平日の午後１～５時まで）

◆◇編集後記◇◆

◆新たな年を迎えました。今年も史料ネットではさらなる活動の充実・発展をめざし、精一杯取り組んでまいりたいと思います。会員・サポーターの皆様には引き続き史料ネットの活動にご理解・ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

◆今回のニュースレターは、猪名寺廃寺シンポ・古代史講座・「平家と福原京～」などたくさんの催しに関する報告をはじめ、宮城資料ネットからも活動報告をいただきました。掲載しきれなかった分も含めこの間たくさんの原稿が集まり、編集担当としては嬉しい悲鳴をあげています。前回を凌ぐもりだくさんの内容となっておりますので、ぜひご味読ください。

◆早いもので今年度の史料ネットの講座も折り返しをむかえました。次回の近世史講座も充実した内容となっております。会員・サポーターの皆様にはふるってのご参加を願うとともに、事務局としてもアピール・情報発信のあり方を見直し、より多くの方々にご来場いただけるように努めてまいりたいと思っております。

◆ニュースレターに関しても、ますます魅力ある誌面づくりを目指していきたいと考えています。会員・サポーターの皆様のご意見・ご感想をお待ちしておりますので、どしどしお寄せください。（こ）

個人会員への入会と“News　Letter”購読のお願い

史料ネットの活動に平素からご協力いただき、ありがとうございます。
歴史資料ネットワークは、改組後も引き続き“News　Letter”を年４回発行いたします（年間購読料：郵送費込み１０００円）。改組とともに今後内容を更に充実させる努力を重ねて参ります。皆様方には引き続きご購読いただきますよう、よろしくお願い致します。

　また、表題にもありますように、ニュースレター会員・贈呈読者の皆様には是非とも個人会員へのご入会（年会費：個人会員５０００円、学生・院生会員は半額）ないしサポーター（一口３０００円以上）としてご支援いただき、史料ネットの発展にご理解・ご協力を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

史料ネット　郵便振替口座
名義：歴史資料ネットワーク
口座番号：００９３０－１－５３９４５

★史料保存関係のホームページ“Archivist　in　Japan”を開設している小林年春さんのご協力により、史料ネットの情報を同ホームページに連載していただいています。http://www.archivists.com/　または http://member.nifty.ne.jp/archivists.com/　または　http://www.asahi-net.or.jp/~hm7t-kbys/archivists/

史料ネット　NEWS　LETTER　No.36　　発行　２００４年2月１６日
編集・発行　　歴史資料ネットワーク

〒657-8501　神戸市灘区六甲台町１-１神戸大学文学部地域連携センター気付　史料ネット神戸センター
TEL&FAX:078-803-5565（開室時間　平日の午後１時～５時）
URL:http://www.lit.kobe-u.ac.jp/~ macchan/　e-mail:s-net@lit.kobe-u.ac.jp